

外郭線城壁の構造について版築が認められないのは屋嶋城だけではなく、同じ香川県の古代山城である坂出市城山城でも確認例がある<sup>(7)</sup>。平成10年度に坂出市教委が、水門近くの内郭線において、石塁から土塁へと変更する部分にトレンチを設定し調査を行っている。土塁の断ち割り状況の写真や報告書そして調査担当者からの教示によれば、石塁に使用されている個々の石材の高さに合わせて幾層にも分けて土層を積み上げてはいるが、版築とは呼べない積み方であるとの意見をいただいた。土塁を構成する粘質土と小礫混在の状況は、屋嶋城北側外郭線斜面で行ったトレンチ調査の状況と共通する。城山城における土塁構造を確認するためのトレンチ調査はこの1箇所のみであり、前報告書では可能性として古代山城外郭線土塁構造に版築が認められないのは、讃岐の古代山城の城壁構造の特徴として指摘できる可能性を考えた。

坂出市城山城も屋島と同様な山の構造をしており、山上部は安山岩で形成され、採取できる土は安山岩が風化したシルトである。さらに城山城は屋嶋城より外郭線城壁が長く、それだけ多くの土砂が必要であったが、屋嶋城と同様な地理的要因により城壁に必要な土砂の採取が行えなかったことから、粗い盛土になったものと考えられる。

なお、対馬の金田城跡でも報告者は城壁内部の盛土状況を版築として報告しているが<sup>(8)</sup>、報告書の写真図版を見る限りでは城山城跡や屋嶋城跡で見られる礫が多く混じる盛土に似た土層状況を示している。これらの3つの城は、城壁に石垣が多く認められ、山上近くには城壁の盛土に必要な土砂があまり採取できない点が共通している。

### 第3節 讃岐における2つの古代山城について

讃岐には屋嶋城跡と城山城跡の2つの古代山城が存在する。『日本書紀』に記述があるものの、長い間、城壁などの詳細が不明であった「屋嶋城」、もう一つは官選史書には記述は認められないが、城門・水門や二重の外郭線構造を持ち、唐居敷と呼ばれるコ字形の削り込みを持つ門礎が城内に点在するなど早くから城の構造が判明していた「城山城」である。

讃岐には2つの古代山城が存在していながら、これまで屋嶋城跡の遺構に関する情報があまりにも少なかったことから、両城における対比ができない状況にあった。屋嶋城跡の確認調査が進展するに伴い、多くの共通点と両古代山城が辿った違いを考える上で重要な手掛かりとなる相違点も見え始めた。今後、これらの古代山城の解明に向けて確認調査は継続され、新たな情報がもたらされると考えられるが、現段階までに判明した点をふまえて、両城を対比することにより、共通点と相違点を抽出したい。

#### 1 城壁構造

##### 城山城跡

城山城跡の外郭線構造は、内郭である第1車道と外郭である第2車道が存在し、二重の城壁構造をもつ。第1車道のうち防御正面である北西方向部分の城壁は、第52図1のとおり前面が石垣となる内托の城壁であり、北端近くの城門の両側のみは夾築の城壁となる。一方、防御背面となる南東側では、第52図2・3のとおり内托の土段となる。第51図のとおり外郭である第2車道は第1車道の前面を巡るように存在するが背面側には延びない。城壁は内托の土段で谷部付近は不明瞭となり、谷部を過ぎると明瞭となる<sup>(9)</sup>。

##### 屋嶋城跡

屋嶋城跡については、第56図のとおり北斜面・南斜面・東斜面の外郭線が内托土段であり、南西斜面外郭線は城門付近が夾築の城壁であるが、外郭線城壁の南半部は前面に石垣をもつ内托の城壁である。

##### 両城の共通点

両城とも外郭線城壁の多くが内托の土段で造られているが、防御正面となる城門が存在する部分では第11・54図のとおり夾築となることが共通する。城門から離れるに従い内托の城壁となるが、土段とはならず前面に石垣をもつ内托城壁であることも共通している。

## 2 遺構について

### 城門

両城ともに1箇所が明確である。城山城跡は第53・54図のとおり城門両袖石の表面加工が丁寧であるが、屋嶋城跡の城門は安山岩の割石を使用し、表面加工は認められない。城山城跡城門の石垣は横長の石材を使用し、横目地が通るように石垣を積んでいる。屋嶋城跡城門は第10・11図のとおり左側の石垣が崩れているものの、横長の石材を使用し、横目地が通るように石垣を積んでいる。

### 両城の共通点および相違点

両城とも城門部分に石垣をもつことは共通しているが、細部においては違いがある。城山城城門は、上部からの土砂によって埋没している可能性も考えられ明確ではないが、城門袖石を中心に石垣が認められ、城門前面石垣については途中から途切れ、前面には石垣の無い夾築の土塁となるのに対して、屋嶋城跡城門は両側壁にも石垣が前面両側についても石垣が連続する違いが認められる。これは城門が立地する地形に大きく左右されているものと考えられ、城山城跡城門が尾根に占地するのに対して、屋嶋城跡城門が谷頭に占地するという違いが認められ、城門背面からの雨水の流入量の違いが城門部分の石垣構造の違いに表れたものと考えられる。

### 水門

#### 両城の相違点

城山城跡では城門から続く第1車道の南側の谷部に水口をもつ水門が1箇所認められるのに対して、屋嶋城跡では2箇所の谷部で水門と考えられる石垣は認められるものの、城山城跡水門のように水口は確認されていない。

#### 両城の共通点

城山城跡では、第2車道に大きく5箇所の谷を取り込んで城壁が造られているが、谷部付近では内托土段の城壁が不明瞭となるとともに、谷部には石垣等の城壁は造られていない。屋嶋城跡についても谷部に石垣が認められる2箇所以外に南嶺山上の北斜面・東斜面などに谷部が存在する。その部分については、谷部付近までは内托土段が存在するが、谷部に近づくにつれて不明瞭となり、谷部には構築物が認められない。この状況は、城山城の第2車道の状況に共通する。水門が造られていない谷部は、落差のある断崖が認められることから、防御上構築の必要がなかったのかもしれない。

### コ字形刳形門礎について

屋嶋城跡と城山城跡の大きな違いは、城門部の唐居敷として設置されるコ字形刳形門礎の有無である。現在、城山城跡には9個の門礎が確認されているが、いずれの門礎の確認位置も城門を想定できる場所ではなく、製作場所付近か門礎設置場所への移動途中で放棄されているようであり、前述の城門にも設置されていない。対して屋嶋城跡では未確認である。同様の門礎は瀬戸内海沿岸の古代山城のみに見られ、石城山城跡・鬼ノ城跡・播磨城山城跡の各古代山城で確認されており、鬼ノ城跡を除く各古代山城でも、讃岐城山城跡と同様に本来の城門部分には設置されていない状況にある。加えて門の扉を受ける軸摺穴が設置されているのは、城門に設置されている鬼ノ城跡のみである。このことから軸摺穴については、城門に設置されてから、扉の幅に合わせて穴が施されたものと考えられる。屋嶋城跡城門で同様の門礎が未確認であるのは時期差であるのか？門礎を製作するための石材が調達できなかったためなのか？現段階では明確にできていない。いずれにしても屋嶋城跡城門の構造は石製ではないことは確かなようであり、柱穴の確認から門の構造物が無かったとは考えられず、このような状況から木製の唐居敷もしくは、それに似た構造のものが設置されていた可能性が高いと考えられる。コ字形刳形門礎については、(向井1999)・(山口2003)・(松尾2006)各氏の分析があるが<sup>(10)</sup>、鬼ノ城跡を除く各古代山城についての出土遺物が皆無であることから、明確な年代を伴う編年は提示されていない。

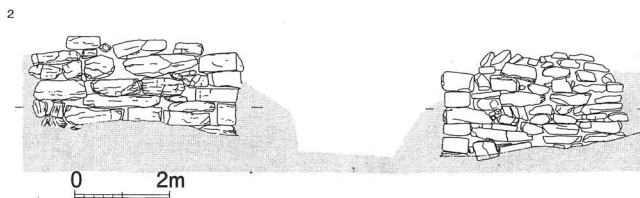
## 3 両城の築城及び存続時期について

城山城跡の二重の城壁の構築時期の解釈については、出宮徳尚氏による見解があり、『日本書紀』の屋嶋城の築城記載に郡名が明記されていることから、讃岐国内に屋嶋城に先行する他の城の存在を示唆することを根拠<sup>(11)</sup>に内郭である第1車道が造られた後に、天智期の築城施策によって臨海側

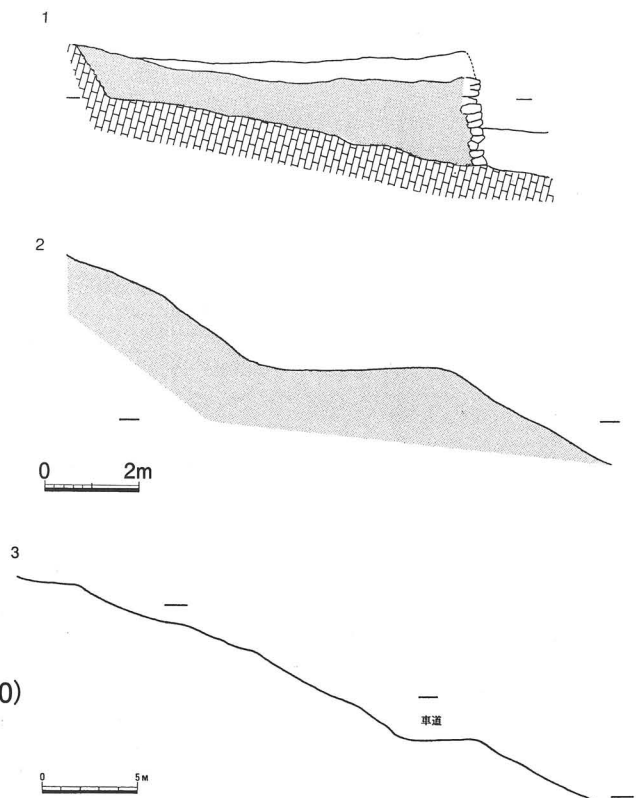
である第2車道が補強改修されたものと推定されている<sup>(12)</sup>。『日本書紀』の屋嶋城に関する記述がどの段階でまとめられたかによって大きく異なる可能性が考えられるが、讃岐城山城の築城が白村江の戦いを遡るものではなく、讃岐城山城がやや早く着手され、相次いで築城されたと考えられる。対外防備の為、整備された屋嶋城及びその可能性が高い讃岐城山城であるが、その後の朝鮮半島における拮抗状況から、唐及び新羅の侵攻は無く、幸いにも戦いの舞台としては使用されることは無かった。今後の資料の増加を待たなければならないが、現状では屋嶋城跡・讃岐城山城跡ともに礎石建物跡は未確認である<sup>(13)</sup>。他の古代山城の建物跡の変遷を見る限り、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷を辿っており、両城ともにそのような変遷を辿らなかったのかもしれない。瀬戸内海沿岸に所在する古代山城からは、量は少ないものの出土遺物が認められ、その年代観の検討が行われているが<sup>(14)</sup>、最近の資料増加により、その元となる須恵器の編年観が変化しているようであり<sup>(15)</sup>、その変化に照らし合わせた場合、これまでの編年による古代山城の存続時期に違いが出てくる可能性が高いと考えられる。屋嶋城の城門における出土遺物も微量ながら増加しており、今回は存続時期については十分な呈示できないが、出土遺物の増加によって詳細な時期が呈示できるものと考えられ、今後の課題としたい。



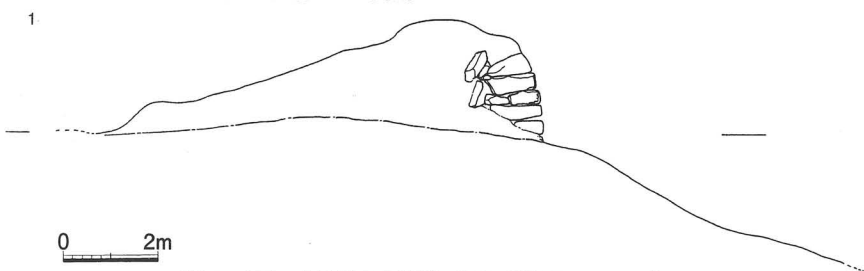
第51図 坂出市城山城跡遺構位置図 (縮尺 1/50,000)



第53図 城門正面見通し図 (縮尺 1/160)  
注9文献より引用



第52図 城山城跡城壁断面図  
(縮尺 1・2 は 1/160 3 は 1/400)  
注9文献より引用

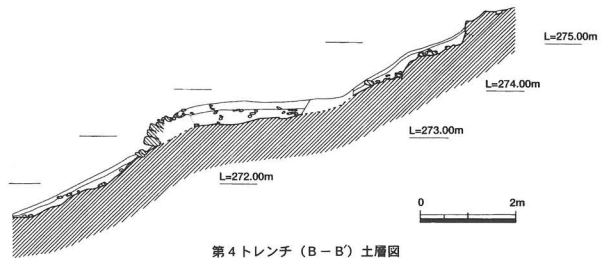


第54図 城門西側断面図 (縮尺 1/160)  
注9文献より引用

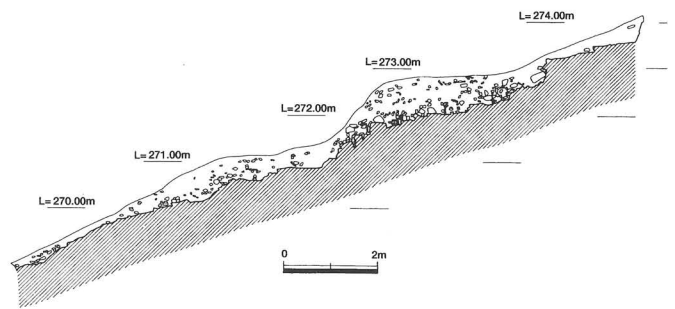
以上が屋嶋城跡と城山城跡の共通点と相違点である。現時点では両城とも調査が充分ではなく、以上の点から論を展開する状況にはないが、今後は屋嶋城跡と城山城跡の比較を通して、讃岐の古代山城の解明に取り組むとともに、現在調査中である同じ四国にある永納山城跡や対岸の鬼ノ城跡とも比較しながら、瀬戸内海沿岸に所在する古代山城の解明にも取り組んでいきたい。



第 55 図 屋嶋城跡遺構位置図 (縮尺 1/50,000)



第 4 トレンチ (B-B') 土層図



第 5 トレンチ平面図・土層図

第 56 図 屋嶋城跡北斜面城壁断面図 (縮尺 1/160)

#### 注

- (1) 日本国内で確認されている古代山城の城門部について、明確に甕城として報告されたものはない。今回の報告にあたり、国内及び朝鮮半島における類例・用語の解釈については、古代山城研究会向井一雄・松波宏隆両氏に多くの御教示を戴いた。屋嶋城城門における甕城についての解釈に間違いがあれば報告者である山元の責任である。

下記の文献に甕城についての解説が掲載されている。

- 太田秀春 2005「第 8 章 朝鮮の城郭における城門形態の変遷」『朝鮮の役と日朝城郭史の研究』清文堂
- (2) 岡山県総社市教育委員会 2005「第Ⅲ章第 3 節 北門跡の調査」『古代山城 鬼ノ城』
- (3) 村田修三 1985「研究室旅行こぼれ話 - 屋島城 - 」『寧楽史苑』奈良女子大学史学会
- (4) 山元敏裕 2005「屋島南嶺で確認した堀切について」『溝漣』第 12 号 古代山城研究会
- (5) 『屋島寺境内并持林田畑図 (複写)』香川県立図書館収蔵
- (6) 総社市埋蔵文化財学習の館館長村上幸雄氏の御教示による。
- (7) 今井和彦 1999「第Ⅳ章 まとめ」『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 10 年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会
- (8) 長崎県美津島町教育委員会 2000『金田城跡』
- (9) 向井一雄ほか 1996「讃岐城山城跡の研究」『溝漣』第 6 号 古代山城研究会

- (10) 向井一雄 1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第27号 地域相研究会  
山口裕平 2003「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』第50集 九州古文化研究会  
松尾洋平 2006「城門構築の一過程について」『古代山城 鬼ノ城2』岡山県総社市教育委員会
- (11) 出宮徳尚 1983「古代山城試論」『日本古代史論苑 遠藤正男先生頌寿記念論文集』
- (12) 出宮徳尚 1992「瀬戸内の古代山城」『新版日本の古代④中国・四国』角川書店
- (13) 城山城山頂に礎石群と呼ばれる部分が存在するが、礎石とされる露出した石材の上面は、いずれも平坦な部分が認められず、建物を構成する並びも認められない。このことから、現在確認できる状況は基盤層の岩盤が露出しているものと考えられ、建物の礎石ではないものと考えられる。
- (14) 松尾洋平 2005「出土遺物について」『古代山城 鬼ノ城』岡山県総社市教育委員会
- (15) 白石太一郎 2006「須恵器の暦年代」『年代のものさし - 陶邑の須恵器 - 』大阪府立近つ飛鳥博物館

## 参考文献

- 兵庫県揖保郡新宮町教育委員会 1988『城山城』
- 向井一雄 2001「古代山城研究の動向と課題」『溝漣』第9・10合併号 古代山城研究会
- 長崎県美津島町教育委員会 2003『金田城跡Ⅱ』
- 高松市教育委員会 2005「平成15年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業（屋嶋城跡）調査概要」  
『高松市内遺跡発掘調査概報 - 平成16年度国庫補助事業 - 』
- 岡山県総社市教育委員会 2006『古代山城 鬼ノ城2』
- 行橋市教育委員会 2006『史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅰ』
- 福岡県教育委員会 2006『特別史跡大野城跡整備事業 太宰府口城門・尾花地区・百間石垣整備事業報告』